

『緋文字』と律法 *The Scarlet Letter and Law*

松 阪 仁 伺*
Hitoshi MATSUSAKA

ナサニエル・ホーソーンの『緋文字』は律法をめぐる物語である。清教徒社会においては、宗教と律法は一体となり、両者はほとんど同義語であった。彼らの律法意識は、新約聖書のパリサイ人にさかのぼるものである。パリサイ人は、律法を遵守することが、すなわち神の意志にかなうものであると信じていた。そういう頑なな立場はイエス・キリストにより、厳しく批判されている。

自身がパリサイ人であり、回心の前には、キリスト教徒の過酷な迫害者であった使徒パウロにとっても律法は大きな問題であった。

清教徒の律法意識はヘスター・プリンの生き方に暗い影を落としている。姦通を犯して、過酷な罰をうけたヘスターは反省もし更生することも誓った。それを阻んだのは、清教徒の頑なな態度ではなかったのか、と思われる。

ヘスターが犯したのは「姦淫するなかれ」という律法であった。その律法は、逆にヘスターとディムズデイルの愛欲の心を、燃え立たせる結果になったのではなからうか。禁止されると、それに反抗する天の邪鬼の精神が存在することは、ホーソーンの同時代の作家エドガー・アラン・ポーが指摘している。

清教徒の法意識は、法治主義で名高いローマ帝国の遺産を受け継いだものでもある。その歪んだ法意識をホーソーンは、アイロニーによって厳しく批判している。

キーワード：ホーソーン、歴史、ロマンス、律法、キリスト教

Key words : Hawthorne, history, romance, law, Christianity

ヘスター・プリンの恥辱の印は、大抵の場合に「緋文字」と言及されて、作品の表題ともなっている。しかしその赤い布きれは、緋文字と称される必然性はあるのか、と詰問されれば答は否に違いない。ほかにも色々な呼称があるはずであり、「緋色の刺繍」でも「赤いA」などでも問題はないように思われる。語り手は、この言葉に特殊なこだわりをもっているようだ。

つまり私の言いたいのは、言語そのものに深い意味がこめられていることであり、この作品の語りにつかく関係していることである。確認して強調しておきたいのは、「緋文字」はヘスターでも清教徒でもなく、語り手自身の命名であることだ。語り手が緋色の刺繍を熟視することにより、心中から自ずと浮かび上がってきた語句なのである。

税関の二階で発見した、いわくありげな布きれに運命を感じた語り手は、その謎を解明しようと試みる。謎めいた織物を目にした時の、語り手の反応は「赤い布」("a certain affair of fine red cloth, much worn and faded")(31)であるが、つぎには「緋色の布」("this rag of scarlet cloth")(31)に変わり、さらには語り手の注意は材質からその形状におよび、つまりアルファベットのA

の形をしていることが認識されて、最後に「緋色の文字」("the old scarlet letter")(31)に落ち着く。

これは感覚的な認知のプロセスである。認識の焦点が定まりシャープな映像を獲得する過程は、カメラのピントをあわせる作業にも似ている。その色合いを「赤」と認識した彼の感覚は、すぐに微妙なちがいに気づき、「緋色」という単語を選択する。最初は布という意識しかなかった語り手は、その形状に注意が向けられて、「文字」という言葉を思いつく。

わたしが抱く疑問は、この変化が果たして感覚レベルにだけ限定されるのか、ということなのだ。語り手の意識の深みから浮かび上がってきた「緋色」「文字」は文化のレベルにも接触するのではなからうか。二つの単語は、聖書においてきわめて含蓄のふかい言葉である。聖書において「緋色」は罪を連想させる言葉であることは、旧約のイザヤ書(1:18)にあるとおりである。

しかし語り手の脳裏をこの言葉がよぎったのは、黙示録の次の箇所を連想したためであろう。

この女は紫と緋色の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで

*兵庫教育大学第2部（言語系教育講座）

満ちている金の杯を手を持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきものらの母」というのであった。わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。

(17:4-6)

注目にあたいするのは、この淫婦が緋色の衣をまとい、宝石と真珠で飾られ、手に黄金の杯をもっていることだ。黄金色の糸を縫い込んだ緋文字を胸につけて、パール(真珠)を抱くヘスターの姿は、この淫婦そのままではなかろうか。語り手はヘスターの描写に黙示録を写し込んだのである。

語り手の脳裏を「文字」が横切ったのも聖書からの連想である。これを最初に指摘したのは、わたしの知る限りではモーリン・クリガンであり、彼女によるとホーソーンはパウロのコリント人への第二の手紙の「神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕えるものとされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は殺し、霊は人を生かす」(3:6)を念頭においている。¹

この場合の「文字」(letter)は特殊な用例であって、「律法」あるいは「成文典」を意味する。欽定訳聖書のギリシア語からの翻訳は、少し無理があったようで、最近の英訳聖書では「成文典」(the written code)とされている。しかしこの箇所は非常に有名であって、現代英語においても、内容や精神に対して文字通りの解釈という意味で用いられている。それは古い契約、旧訳聖書を支配する精神でもある。あるいはユダヤ教の律法主義を暗示する。この立場の代表には、十戒との関連でしばしばモーセが選ばれることがある。たとえばバニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*)では、旧約最大の英雄は律法主義の権化として恐ろしい巨人として描かれている。

律法主義というのは、後述するが、ホーソーンの清教徒を支配する精神でもある。だとすると「緋文字」という言葉そのものが、この作品の冒頭の場面を暗示している。語り手が「緋色」と「文字」というふたつの単語を連想したときに、すでに、『緋文字』の物語世界のテーマの大きな枠組は完成していたのだ。

この二つの単語を手がかりにして、ホーソーンは物語世界を構築していった。それは同時に物語に聖書の世界を取り込む、あるいは写し込む作業でもあった。『緋文字』にはこういう、言葉遊びの要素が存在するのである。これはホーソーンの執筆過程をかなり忠実に再現するものでもあろう。letter は律法主義のことであるが、同時にそれは「手紙」でもある。むしろ、これが通常われわれが思い浮かべる意味である。欽定訳の誤訳(?)は、

以下のようなおもわぬ副産物を産み出す結果となった。

語り手はこの意味も意識していたはずである。手紙といえば、キリスト教徒であれば、真っ先に思い浮かべるのは新約聖書の書簡群、特にパウロの書簡であろう。letter はパウロの手紙のことでもあるのだ。

従来のホーソーン研究においては、パウロの信仰とホーソーンについては十分に論じられなかったように思われる。しかし初期ホーソーン研究を代表するワゴナー(Hyatt H. Waggoner)は「鉄石の人」("The Man of Adamant")について、物語はコリント人への第一の手紙「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」(13:13)のコメンタリーである、とまで言い切っている。この一節にこめられた深い意義を物語にしたのが、この短編だという意味にとっておいてよからう。²

主人公は汚れた世を厭い、みずからの信仰を純粹にたもつために一人荒野に旅立つ。かれの信仰の強靱さは賞賛されるべきであるのだが、決定的に欠けているのは、愛なのである。結果としてかれの信仰までが、腐敗しきってしまった。愛に裏打ちされていない信仰などは、無意味であるという、パウロのキリスト教観をアイロニーという形で肯定したのが、この短編だといえよう。同時にこれはアメリカの清教徒に放たれた鋭い批判の矢でもある。

その他にも「牧師の黒いヴェール」("The Minister's Black Veil")にもやはりコリント人への第二の手紙の影響が指摘されているが、わたしもこの傑作短編の背後にパウロの思想の影を感じる。そのパウロの書簡の中心的テーマは律法であった。

それは新約聖書の中心テーマのひとつでもあった。イエスは硬直した律法主義を批判し克服しようとした。ために、保守的なパリサイ人から執拗な攻撃をうけた。キリストはモーセの十戒について革命的な再解釈をおこなっている。姦淫にかんする部分を引用する。

『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見るものは、心の中ですでに姦淫をしたのである。(マタイ伝 5:27-28)

モーセの律法が禁じるのは行動であり、行為に関する禁止命令である。律法は他人の妻を見て情欲をおこしてはいけないとは命令してはいない。禁じられているのは、具体的な行為である。姦淫の心をおこしてはいけないとは一言も述べていないのだ。むしろそれが望ましいし、それが本来のあるべき姿であろう。しかしたとえ姦淫の

心をおこしたことが知られても、罰せられるわけではない。あくまでも禁止されているのは具体的な外に現れた行為なのである。

それに対してイエスが求めるのは内面的な倫理であり規範である。無論この条件が整っていれば行為としての姦淫はありえないことになる。イエスが求める道德律は、モーセよりはるかに厳しい。モーセの戒律は守ることができても、イエスの教えを忠実に実行することは至難の業であろう。

新約と旧約の相違は、精神か行動か、内面規定であるか行動規定であるか。簡単にいうとそういうことに帰着しよう。しかしイエスが克服しようとした「姦淫するな」という戒律は、それ自体が過ちという訳では勿論ない。イエスは、律法を廃棄するためではなく、むしろ律法を成就するために来たことはマタイ伝(5:17-20)に明言されている。イエスが糾弾してやまないのは、ただ律法の一語一句のみに捕らわれて、それを墨守することが宗教であり神の意志にかなうという立場である。新約に登場するパリサイ人はそういう保守的なユダヤ教の立場を代表していて、新しい福音をもたらしたイエスを貶める機会を虎視眈々と窺っている。

律法の問題は、使徒パウロにとっても大きな障害であった。信仰と律法の関係は調整すべき、一大課題であった。自身がパリサイ人であり、キリスト教を迫害したパウロはダマスカスへの途上で劇的な回心をして、殉教を恐れぬ熱烈なキリスト教徒に変貌する。そのパウロにとって、律法は自身の内面に関わる問題であり、格闘せねばならない最大の課題であった。パウロの苦闘と、いかに律法主義を克服したかは、各地の教会にあてた書簡、とくにローマ人への手紙に綴られている。律法主義の克服は、同時に民族宗教(ユダヤ教)から世界宗教(キリスト教)への飛躍のために欠かせぬステップであった。パウロは律法ではなく、信仰こそが神に至る道であると説いたのであった。ホーソーがパウロの書簡に魅せられたのは清教徒がまさに律法主義者、それもイエスの敵であるパリサイ人に典型的に表れている律法主義者であったからだ。

『緋文字』における清教徒は正に律法主義者の典型である。その例は枚挙に遑がないくらいあるが、代表的なものを引用してみよう。第二章の劈頭ちかくの部分である。

怠惰な召使いか、親が当局に引き渡した手に負えない子供が鞭うち台でおしおきを受ける程度のことかもしれない。道德不要論者とか、クエーカー教徒とか、その他の異端の信者が鞭打たれて町から追放されるところか、あるいは白人の「火の水」に酔いしれて通りで大騒ぎをしたインディアンが鞭で森に追

いやられるところかもしれない。あるいは、治安判事の気性の激しい未亡人、老ヒビンズ夫人のような魔女が絞首刑になるところかもしれない。いずれの場合でも、見物人の態度にはほぼ変わらぬ一定の謹厳さがあった。宗教と法律がほとんど一体をなし、しかも両者が公衆の性格のなかで渾然と融合していたので、おおよきの懲罰となれば、その軽重を問わず、ひとしく畏敬と畏怖の念をもって受けとめた民衆に、それはふさわしい態度であった。

It might be that a sluggish bond-servant, or an undutiful child, whom his parents had given over to the civil authority, was to be corrected at the whipping post. It might be, that an Antinomian, a Quaker, or other heterodox religionist, was to be scourged out of the town, or an idle and vagrant Indian, whom the white man's fire-water had made riotous about the streets, was to be driven with stripes into the shadow of the forest. It might be, too, that a witch, like Mistress Hibbins, the bitter-tempered widow of the magistrate, was to die upon the gallows. In either case, there was very much the same solemnity of demeanour on the part of the spectators; *as befitted a people amongst whom religion and law were almost identical, and in whose character both were so thoroughly interfused, that the mildest and the severest acts of public discipline were alike made venerable and awful.*(italics added) (49-50)

英文のイタリックの部分に明瞭に見て取れるが、清教徒にとっては、宗教と律法はほぼ同義語であった。これは少し解説を要する。原文の law は訳文では「法律」とされている。たぶんこの文脈では、この方が正しいのかしれない。

本論においては「律法」は神をその權威の拠り所とする宗教法の意味で用いる。モーセの十戒がその典型である。「法律」は世俗的な法の意味で用いる。常識ではあるのか、古代においては両者は実質的につながっていた。

ホーソーが強調する清教徒の法意識にも、この両面があることは当然である。本論では、宗教的側面を強調している段階であるので「律法」を用いているわけである。世俗の法律意識については後に論じる。この点においては、清教徒はローマ帝国の後継者である。

清教徒は律法主義者であったゆえに、クエーカー教徒などの、律法に敵対する立場のキリスト教徒が不倶戴天の敵であったのは当然である。ちなみに文中の

Antinomian (訳語では「道徳不要論者」)の語源は anti=against+nomian<nomos(=law)ということであり、まさに反律法主義者の意味である。さらに清教徒が敵視したのはインディアンであり魔女であった。これらは清教徒にとっては、悪魔の手先にはかならなかった。さらには清教徒にとっては開拓された植民地が神の王国であれば、新世界の原始の森は悪魔の巣窟であり、それを住処とするのが、魔女でありインディアンであった。清教徒の偏見は、「若いグッドマン・ブラウン」("Young Goodman Brown")の魔女の森に鮮明に写し込まれている。

森は無法地帯であった。その価値観を代表するのはヘスターであり、彼女は「森の女」と呼ばれてしかるべき女性であった。『緋文字』はコスモスとしての植民地と、カオスとしての森の対立の物語なのである。

植民地の総督たるベリンガムが元来は「法律家」(lawyer)であったこと、冒頭の場面で罪人のヘスターを先導する役人については、「清教徒の法律の陰気な厳格さ」("the whole dismal severity of the Puritanic code of law")(52)をその容貌が体現していたこと。これらが、律法主義者としての清教徒を雄弁に物語っている。かれらは厳格かつ陰惨なる律法主義者であった。

ヘスター・プリンという美貌の女性、彼女の姦通はこういう社会での出来事であったことをしっかりと認識しておく必要があろう。それゆえに彼女の運命に大きな力を及ぼし、ねじ曲げていることも事実である。以下、そのことについて論じる。

ヘスター・プリンについては、森の場面での行動が印象的であり、現代であればフェミニストと呼ぶべき女性に変貌した彼女は、牧師を誘惑する。しかし彼女は最初から、このような果敢な女性であったわけではない。姦通の結果として過酷な罰をこうむったヘスターは、反省もし更生を誓ったのである。彼女はどのようにボストンにとどまったのか。アメリカの清教徒の支配地さえ離れれば自由に緋文字をなげすめることができたのである。その事情をホーソーンは正に達人の筆さばきで次のように語る。

ことによると、また—いや、たしかにそうだったのだが、彼女は自分自身にも秘密を隠していて、それが彼女の心の奥から、まるで蛇が穴から出るように出てくるときは、いつも真っ青になったけれども—それでも、ことによると、彼女をあの運命的な場所や小道がある土地にふみとどまらせていたのは、もっと別の思い込みのせいだったかもしれない。その土地には、この地上においてこそ認められないけれども、最後の審判の法廷にふたりをみちびき、ふたりの永劫の報いとして、その法廷を結婚の祭壇に変え

てしまう深いきずなで結ばれていると彼女が思いみなす、あの人が歩を運んでいるのであった。魂の誘惑者はこういう妄念を彼女の思いにしのびこませ、それでいて彼女がその妄念にあらわな歓喜をもって必死にすがりつくのをあざ笑い、次にはそれを彼女から取り上げようとたくらむのであった。彼女にしても、この妄念を正視することはめったになく、あわててもとの土牢に封じ込めようとしたのだ。彼女がむりにも自分に信じ込ませようとしたこと—ニューイングランドに住みつづける動機として、彼女が最終的に理由づけたこと—それはなにかば真実、なにかば自己欺瞞であった。彼女は自分に言い聞かせたのである—この土地はわたしがあやまちを犯した場所、だからこの世の罰を受けるのも、この場所でなければならず、それに、きっと、日ごとの恥辱の苦悩のために、わたしの魂は清められ、受難のたまものであるだけに聖者の魂にも似た、さきに失ったのとは異質の、あらたな純血を獲得することになるだろう、と。

I might be, too—doubtless it was so, although she hid the secret from herself, and grew pale whenever it struggled out of her heart, like a serpent from its hole,—it might be that another feeling kept her within the scene and pathway that had been so fatal. There dwelt, there trode the feet of one with whom she deemed herself connected in a union, that, unrecognized on earth, would bring them together before the bar of final judgment, and make that their marriage-altar, for a joint futurity of endless retribution. Over and over again, the tempter of souls had thrust this idea upon Hester's contemplation, and laughed at the passionate and desperate joy with which she seized, and then strove to cast it from her. She barely looked the idea in the face, and hastened to bar it in its dungeon. What she compelled herself to believe, —what, finally, she reasoned upon her motive for continuing a resident of New England, —was half a truth, and half a self-delusion. Here, she said to herself, had been the scene of her guilt, and here should be the scene of her earthly punishment; and so, perchance, the torture of her daily shame would at length purge her soul, and work out another purity than that which she had lost; more saint-like, because the result of martyrdom.(80)

われわれが肝に銘じなければならないのは、ヘスターがうけた処罰の過酷さである。視線の恐ろしさは、神話においては、頭髮に蛇がからみつき視線によって人を石に変えるゴルゴンが代表している。その原始的な恐怖は、民間伝承においては「凶眼」(the Evil Eye)に姿を変えている。そのテーマは文学化されてエドガー・アラン・ポーの傑作として後世に名をとどめている。「裏切の心臓」("The Tell-Tale Heart")は、ただただその目が恐ろしかったために、老人を殺害する物語である。最近のニュースでは、猫をめぐるトラブルから、監視カメラをつけられた一家の主婦が精神に変調をきたしたというのがあった。

であるから、緋文字を人目にさらさせることは、人間性を無視した、非人道的な罰であった。それは作者みずからが強調している。ヘスターがその過酷な試練に耐え抜いたのは、有り体に言えば、愛する人がいたためであった。しかしヘスターは、その愛欲の心をみずからに禁じた。少なくとも、その努力は続けた健気な女性であった。

ここで思い起こされるのは、ヨハネ伝第八章の冒頭の姦通女のエピソードである。女を連れて、イエスの前にあらわれたパリサイ人に向かって、イエスは「罪のないものがまずこの女に石を投げよ」と衝撃的な言葉を口にする。誰もいなくなった時に、イエスは女に向かって「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」と優しく諭す。イエスが姦通を赦したのは、想像するに、女が反省と悔恨の色をうかべていたためであろう。救世主は、罪に対して常に寛大という訳ではないのだ。

あるいは同じ道がヘスターにも開かれていたのではないかと考えるのはそれほど荒唐無稽な想像ではなからう。イエスの教えが脈々と生き続けていれば、少なくとも、再び牧師を誘惑するという罪は犯さなかったのではなからうか。と想定すれば、これは清教徒に対する痛烈な批判でもある。彼らはイエス・キリストではなく、パリサイ人の後継者であり教え子なのである。

同時に上の引用に見られるのは、人格の分裂である。意識と無意識、理性と感情、頭で考えることと心で感じることに決定的な乖離があるのである。物語はヘスターが、一元性と統一性を回復する過程でもある。

ヘスターは律法を投げ捨てて、森の原理に身をゆだねることで統一性を回復しようと試みる。それにより、自分自身とも和解しようとするのだ。森の場面に見るヘスターは、積極的に牧師を誘惑する危険な女に変身している。もはや、律法のくびきを逃れた人間の行動にはかならない。

わたしがパウロの人間性の洞察に驚嘆するのは、罪を確定し罪を禁じるはずの律法が逆に罪をそそのかすという指摘である。例えば、ローマ人への手紙の中に「律法

がはいり込んできたのは、罪科の増し加わるためである」(5:20)とある通りである。禁止があるとそれだけ、その禁止を破ろうとする衝動が働くのが、人間性であろう。してはいけないと命じられると、一層したいという思いが募るのが人情ではなからうか。人間にはそういう天の邪鬼の精神が宿っているのではないか。微に入り細をうがって、律法の功罪を論じるパウロであるが、この人間心理の洞察は見事である。十九世紀のアメリカ文学に親しんだ人間であれば、してはいけないということを知っているにもかかわらず、否、知っているからこそ、してしまうという非合理の世界を描いたポーの短編を思い出す。

「姦淫をしてはいけない」という律法はどの民族を問わず受け入れられる、普遍的な妥当性をそなえた教えであろう。その正しさを疑う者はいないし、それはわれわれの行動の規範になる。しかし、場合によってはそれが罪を助長する場合もあるというのである。

とくに恋愛の場合には、禁止されればされるほど、それだけ激しく愛欲は燃え上がるのではあるまいか。少しでも文学に親しんだ者であれば、ヘスターとディムズデイルの再会が必然であることがわかるはずだ。森の場面は、物語と人間心理の論理から必然と断ぜざるをえない。ヘスターとディムズデイルが、処刑台の場面の後も、愛欲のこころを捨てていないことを、ホーソーンは、微妙な筆使いながら、明瞭に語っている。緋文字に注がれる人々の非難の視線に、ヘスターが苦しんだ様を描いたのちに、ホーソーンは次のように語る。

しかしときには、幾日かのあいだに一度、あるいは幾月かのあいだに一度、彼女はひとりの目を一ある人間の目を一ほんの一瞬であったが、安らぎをもたらし、彼女の苦悩の半分を分かち合ってくれるような目を、その不名誉な烙印のうえに感ずることがあった。が、次の瞬間、苦悩は、以前にも増した苦痛のうずきをともなって、どっとばかり逆流してくるのであった。というのは、その短い瞬間に、彼女はまたあらたな罪を犯していたからである。が、ヘスターはひとりで罪を犯したのであるか？

But sometimes, once in many days, or perchance in many months, she felt an eye—a human eye—upon the ignominious brand, that seemed to give a momentary relief, as if half of her agony were shared. The next instant, back it all rushed again, with still a deeper throb of pain; for, in that brief interval, she had sinned anew. Had Hester sinned alone?(86)

つかの間の安らぎをあたえてくれる視線、苦しみの半分

を分け持ってくれる人とは、恋人たる牧師以外のだれであろうか。彼女が新たに罪を犯したというのは、二人は視線によって互いの愛を確認しあったからである。しかしこの段階においては、彼女はそれが罪であることを認識していたために、新たな良心の苦しみを覚えたのである。しかも新たに罪を犯したのはヘスターだけではなかった。

牧師も肉欲と律法の葛藤に苦しんでいるために、みずからの肉体をさいなむ苦行を行う。これ以降の物語の筋は、ヘスターと牧師がいかにして葛藤と分裂から逃れるかが基本となっている。

ヘスターがその一元性を回復させる道として選択したのは、森の原理に身をゆだねることであった。彼女は、元来が厳格なる清教徒社会には馴染まない女性であった。緋文字は、罰であったが、華麗なる刺繍に仕立てのは、反抗のころからであろう。彼女が監獄から出てくる様子を、語り手が「自然の威厳」("natural dignity")(52)や「自由意志」("free-will")(52)と形容するのはそのためである。彼女の本質は奔放なる「森の女」なのである。律法は彼女がまとった衣服にすぎない。であるから、森の場面でヘスターは律法の象徴たる緋文字を、あっさりとは投げ捨てて森の自由な空気を呼吸することができる。彼女は森の原理に身をゆだねることで葛藤から逃れる。

情熱と感情において森の女であったヘスターは、七年の後に、その思想と思索においても森の女に変貌してしまう。

世界の法律は彼女の法律ではなかった。人間の知性は、あらたに解放されて、数世紀以前よりよほど活発で、よほど広範な活動領域を占めるようになっていた。武人は貴族や王を打倒した。武人よりも豪胆な人たちは一実的にというよりは、彼ら本来の領域である理論の領域内でのことだが一旧来の原理と不可分にむすびついている古い偏見を根底にすえた全体系を破壊し、再構築したのであった。ヘスター・プリンはこういう精神を吸収していた。

The world's law was no law for her mind. It was an age in which the human intellect, newly emancipated, had taken a more active and a wider range than for many centuries before. Men of the sword had overthrown nobles and kings. Men bolder than these had overthrown and rearranged — not actually, but within the sphere of theory, which was their most real abode — the whole system of ancient prejudice, wherewith was linked much of ancient principle. Hester Prynne imbibed this spirit. (164)

清教徒の律法は、依然として彼女を縛っていたことは事実である。緋文字を着けることによってヘスターは外面的には清教徒社会に恭順の意を表していた。しかし精神はすでにその桎梏から逃れていたのである。それは西洋世界全体を縛っていたキリスト教世界観の揺らめきに譬えられている。

ヘスターは恋人に会うために、新世界の原始の森に踏み行っていく。その暗い森はすなわち彼女の心象風景であり、精神の荒野であった。

ふたりがあゆんだ道は、半島をこえて本土にさしかかると、ほんのせまい小道になった。それは原始の秘境へうねうねとつづいていた。森は小道のすぐそばまでせまり、その両側に黒々と、また鬱蒼とそびえ、頭上の空がほとんど見えないありさまだったので、ヘスターには、森はまさしく彼女がそれまでながらく彷徨してきた精神の荒野の似姿をしているように思われた。

The road, after the two wayfarers had crossed from the peninsula to the mainland, was no other than a footpath. It straggled onward into the mystery of the primeval forest. This hemmed it in so narrowly, and stood so black and dense on either side, and disclosed such imperfect glimpses of the sky above, that, to Hester's mind, it imaged not amiss the moral wilderness in which she had so long been wandering. (183)

この描写には、作者のヘスターに対する叱責が感じられる。この原始の森の背後には、宗教と文学の長い伝統があることに注意せねばならない。この森に『妖精の女王』第一巻の赤十字の騎士が迷い込む「迷いの森」("the wandering wood")の影響を発見したのはランダル・スチュワートであった。³ ホーソーンの念頭には大詩人の叙事詩があったことは否定できまい。ちなみに error「あやまち」の語源が wander「さまよう」であることを指摘しておくことも無駄ではあるまい。同時に彼の意識には、ダンテの『神曲』劈頭の「暗い森」があったことも確かであろう。ヘスターは暗い道徳の荒野をさまよう女性であった。

「荒野」(wilderness)は聖書の連想の豊かな言葉である。キリストが悪魔に誘惑されたのも、モーセに率いられたイスラエルの人々がさまよったアラビアの砂漠もやはり荒野であった。ヘスターは過ちに満ちた危険な場所を彷徨する女性であったことを、作者は繰り返し強調している。この森の場面でとったヘスターの行動は、ホー

ソーンが決して赦さないものであった。

清教徒たちのあやまりが、過剰な律法意識に由来し、それゆえの間違いであれば、ヘスターのあやまちは正にその対極に位置するものである。ちなみに聖書（欽定訳）において、「無法」(lawless)は一例を数えるのみであるが、きわめて悪魔的なニュアンスで用いられていることを指摘しておきたい(1 Timothy 1:9)。清教徒たちが律法の一点一画にこだわりすぎたために、道を外れたとすれば、ヘスターのあやまちはその対極にあるのである。

清教徒の法意識は神の定めた律法のみにとどまらず、世俗の法にも関係する。今度は、話をその方向に転換したい。彼らの法意識は、初期キリスト教の敵であり過酷な弾圧者であったローマ帝国の法意識でもあった。

『緋文字』の第八章で、総督の邸宅を訪ねたパールの異様に華やかな服装を観て、ベリンガムは「いや、そのような子供の母親なら、当然緋色の女、例のバビロンの女の典型でもなければならぬことは、承知しておくべきでした！」("Nay, we might have judged that such a child's mother must needs be a scarlet woman, and a worthy type of her of Babylon!")⁽¹¹⁰⁾と意味ありげな言葉を口にする。この場面は、ヘスターの親としての能力と資格に疑問をもった清教徒の指導者たちが、彼女からパールを取り上げるべきかどうかを、話し合う場面の一コマである。

ディムズデイルの熱心な口添えもあって、ヘスターは危うく、唯一の生き甲斐を取りあげられる窮地を脱する。物語のこの部分は、冒頭からの筋の展開の緊張がやや弛緩するかに思える部分であり、やや詰め物といった感じもする箇所である。しかしさすがにホーソーンというか、テキストにいろいろな工夫をしてくれていて、それなりに面白く読める配慮がなされている。何気ない物語の展開に、清教徒に対する鋭いアイロニーが潜んでいるのである。というかこの部分は、その気になって読めば、ピューリタンへの諷刺に満ちている。

ベリンガムが口にする「緋色の女」は黙示録への言及である。当時のキリスト教徒であれば聖書を熟読玩味していたはずであるから、自然な反応である。ヘスターから姦通、姦通から黙示録へつながりは、直線的な連想であって、とくにわれわれの注意を喚起する点はないように見える。しかし、黙示録をよくよく読み込んでみると、この何気ないエピソードに秘められたホーソーンの意図が透けてみえてくるのだ。

その気になって読むと『緋文字』はアイロニーに満ちている。その中でもこのベリンガムの発言は、絶妙かつ壮大な諷刺であろう。

冒頭の処刑台の場面で、ヘスターが黙示録を念頭において描かれていることには注意を喚起しておいた。金糸

を縫い込んだ緋文字を胸につけ、パールをいдаく彼女の姿は黙示録そのままである。彼女は、聖書の権威を借りて断罪されていると考えられる。この時には語り手の想像力は、清教徒の側に立っているようだ。しかしすぐにヘスターは、架空のカトリック教徒の目を通してであるが、聖母マリアに喩えられていることにも注目せねばならない。ヘスター＝姦通女という図式は微妙にずらされる。

ベリンガムの発言は、処刑台のヘスターを意識したものである。植民地の総督に発言させた著者の真意をさぐするためには、まず黙示録の姦婦は何ものなのか、を突き止めねばならない。

彼女の名前は「大いなるバビロン」である。バビロンは邪悪なる都市の典型として選択されたにすぎず、この姦婦の正体はローマなのである。黙示録が書かれた時代には、キリスト教徒に対する残酷な弾圧が繰り返された。6節は明らかにそれを意識している。高価な紫と緋色の衣服は、帝国の地位を象徴しているし、金と宝石は帝国の富を暗示している。

われわれは淫婦として描かれたローマの姿に、黙示録の作者の鋭いアイロニーを看取せねばならない。ギリシア人は、その哲学によって歴史に燦然とかがやく名声をのこした。ローマの偉大さは無論その巨大な帝国によって歴史に金字塔をうち立てた。ローマ人が歴史にのこした精神的な遺産とは、法律ではなかるうか。そのローマが淫婦として描かれるのは、すなわち無法な国家であるという痛烈な皮肉であろう。黙示録の書き手によれば、ローマは「無法な法治国家」なのである。

総督のベリンガムが口にする「緋色の女」は当然ながら、ヘスターにたいする非難の意図がこめられている。法律家でもあるベリンガムがヘスターの無法をなじっているのである。しかし、その弾効はみずからに跳ね返ってくるのではないか。というのが私の判断なのである。ここにホーソーンは強烈な皮肉をしかけている、というのが私の想像なのである。

聖書の描く大いなるバビロンには、バビロンとローマが混在している。旧約においてバビロンを墮落した町として激しく弾効したのエレミヤであった。エレミヤの描くバビロンは水にうかぶ町となっていて、この大いなるバビロンもそれを踏襲している。しかし9節にある「七つの丘」は明らかにローマのことである。ローマは伝承によれば、七つの丘にまたがって建設された都市であった。

黙示録には二種類の対照的な都市が描かれる。ノースロップ・フライの「黙示的イメージ」と「地獄的イメージ」に対応する。⁴ 前者は最後に天から舞い降りてくる新しいエルサレムであり、後者はこの大いなるバビロンである。悪と善、時間と永遠、地上と天上、邪悪と正義、

偶像（崇拜）と信仰の典型である。新しいエルサレムは花嫁であり、大バビロンは姦婦である。

この姦通にはアリゴリカルな意味が付与されていることに注意せねばならない。つまり姦通とは、神への信仰の道から逸れて偶像崇拜にはしることを意味しているのである。この部分はローマが、地中海の支配者として偶像崇拜を強制したことを念頭においている。

バビロン＝ローマという聖書の約束は、ホーソーンの意識の中では、ローマ＝アメリカに拡大したというのが、私の想像なのである。

そのアメリカとは十七世紀よりはむしろ、「明白なる運命」(Manifest Destiny)を標榜して領土拡張の帝國的野心に燃えた十九世紀のアメリカであり、その原点を十七世紀に求めたと解釈する方が自然であろう。ローマ帝国と十九世紀中葉の合衆国の間に、国家としての同質性を見たのであった。ホーソーンはアメリカがローマ帝国と同じ運命をたどると予感していた。ローマは世界帝国であったとしても、それは地中海を中心にした、ヨーロッパ人にとっての「世界」にすぎなかったが、二十一世紀のアメリカはソビエト連邦崩壊後の、唯一の超大国として世界に君臨している。アメリカの国鳥、国家を象徴する鳥は鷲であるのは、ホーソーンも「税関」で言及しているが、ローマと共通している。

ローマ人と同様にアメリカ人の法律好きは有名である。現代においても、かれらの訴訟好きは、日本人の想像を超えている。訴訟の件数と弁護士の数、世界に冠絶している。キリスト教に改宗する前のローマは、キリスト教の残酷な迫害者であった。清教徒はキリスト教徒でありながら、自らの宗旨に反する宗教者にたいする過酷な弾圧は、ホーソーンが繰り返し指摘するところである。

ベリンガムの「バビロンの女」という言葉は、ヘスターに対する非難であったが、それは自らに跳ね返ってくる批判なのである。『緋文字』には、こういう隠微なアイロニーが潜んでいる。清教徒に対するアイロニーは、よくよく注意してみると、物語の冒頭からホーソーンが仕掛けているものである。

序文としては、異例に長い「税関」が終り物語の幕が開いてすぐに、読者の目に飛び込んでくるのは、「美德と幸福のユートピア」("Utopia of human virtue and happiness")(47)という文脈にそぐわない言葉である。ホーソーンの筆が紡ぎ出すのは陰惨なる光景である。黒ずんだ服を着た、陰気な人々が広場に集結しているのは、罪人をまっているのである。さらに作者の筆は、墓地と監獄、その監獄のまえに生えている見苦しい雑草の描写にうつる。暗い風景の中で、「ユートピア」が異彩を放っている。

これは、清教徒たちが万里の波濤をこえて新世界にわたってきたのは、宗教の理想郷を建設するためであった

という歴史的事実をふまえている。「ユートピア」はトマス・モアの造語で、その著書のタイトルであった。モアが理想郷を描いた真意は、現実のイギリスを批判し諷刺するためであった。モアのアイロニーは、その語源が「どこにも無い場所」(nowhere)であることから察せられる。ホーソーンは当然ながら、文学史の常識には通曉していたはずである。

つまりこの言葉に、読者はホーソーンの皮肉を看取することができる。というよりも看取せねばならない。この言葉が、作品のアイロニーの構造に気づかせる役割を果たしている。その例をもう少し検討してみたい。

先にヘスターが総督の屋敷を訪問したことに触れた。それはヘスターが刺繍をほどこした手袋を届けるためでもあった。ヘスターは、針仕事によって生計を立てていた。冒頭の描写に見られるように、清教徒の服装は本来、地味で簡素なものであった。緋文字の華麗な刺繍は、当時の奢侈禁止令に違反するものであった。ヘスターが証明してみせた針仕事の腕前は、謹厳実直なる植民地においては無用のものであったはずだ。ところが事実はそのようではなかった。地位と富にめぐまれた一部の清教徒たちは、平民にはこの種の贅沢を禁じておきながら、豪華で威厳のある服装を好んだのである。このダブル・スタンダードは彼らの偽善を端的にしめている。彼らは立法者でありながら、みずから法を破っているのである。この偽善こそがホーソーンが最も憎んだものであった。

次の引用はヘスターが総督邸の扉をノックしたときの様子である。

ヘスター・プリンが玄関にぶらさがっていた鉄のノッカーを持ち上げて打ち鳴らすと、その合図に応じて総督の年奉公人のひとりが出てきた。この奉公人、元来はイギリス生まれの自由民だったが、いまは七年限の奴隷の身分であった。その期限のあいだ彼は主人の所有物で、牛や組立椅子と同様に売り買いできる商品であった。この奴隷は青い服を着ていたが、それが当時の年奉公人の制服であったし、それ以前のずっと昔から、格式高いイギリスの旧家のしきたりであった。

Lifting the iron hammer that hung at the portal, Hester Prynne gave a summons, which was answered by one of the Governor's bond-servants; a free-born Englishman, but now a seven years' slave. During that term he was to be the property of his master, and as much a commodity of bargain and sale as an ox, or a joint-stool. The serf wore the blue coat, which was the customary garb of serving-men at that period, and long before, in the old hereditary

halls of England. (104)

1957).

さりげなく歴史が再現されている。しかし、この描写にわれわれは痛烈なアイロニーを嗅ぎとるべきではなかろうか。奴隷を意味する単語がふたつも使われていること。故国では自由であった人間が、新世界において売り買いの対象となる奴隷に身をおとしていること。こういう点に、作者の秘められた意図を感じる。

清教徒たちが万里の波濤をこえて新天地をもとめたのは、英国が悪の巣窟であったからではないのか。彼らがみずからの英雄的な行為を、エジプトから約束の地をめざすイスラエルの民になぞらえたことは、歴史の常識である。エジプトでは彼らは奴隷の境遇に苦しんでいた。モーセに率いられた民族大移動は、奴隷から自由への脱出(Exodus)であった。アメリカが約束の地であるというのは、現代においてもかれらの国家として国民としてのアイデンティティの一部をなしている。

「アメリカ神話」を下敷きにして上の引用を読めば、事実はまったく逆であったことが強調されていることが理解されるはずである。総督邸の使用人にとっては、その旅は自由から束縛の境遇への船旅であったのだ。ホーソーンの時代においては、黒人奴隷の問題は熱く論議された問題であった。南北戦争という内戦の原因のひとつは、奴隷問題であった。アメリカの奴隷制度の濫觴は、清教徒の精神にあったのである。

注

『緋文字』からの引用は以下の版による。作品からの引用にはページ数のみを記す。また日本語については八木敏雄氏の訳を利用させていただいた。

Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*(Columbus: Ohio State University Press, 1962)

八木敏雄訳、『完訳：緋文字』（岩波書店、1992）

1 Maureen Quilligan, *The Language of Allegory: Defining the Genre* (Ithaca: Cornell University Press, 1979), pp.54-55.

2 Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, rev. ed. (Cambridge: The Belknap Press, 1971), pp.106-11.

3 Randall Stewart, "Hawthorne and *The Faerie Queene*," *Philological Quarterly*, 12 (1933), pp.196-206.

4 Northrop Frye, *Anatomy of Criticism: Four Essays* (Princeton: Princeton University Press,